ジブリ絵職人のアニメ筆

「ハウルの動く城」（平成十六年）
「ゲド戦記」（平成十八年）
「崖の上のポニョ」（平成二十年）
「借りぐらしのアリエッティ」（平成二十二年）

スタジオジブリ映画の魅力の一つに背景画（アニメーションの動かない絵）の美しさがあげられる。それは、見ていてすいこまれそうなほど美しく、みんなの心も和ませるふしぎな魅力にあふれている。しかも一本の映画には千まいをこえるほどの背景画がかかれている。それには、一本の筆で細かい線から幅のある広い面まで描けるオールマイティな筆が必要だ。よい背景画をかくために、使いやすい筆を使うことはとても大切なことなのだ。実は、ジブリの映画制作では、熊野町で一本一本手作りされた筆も使われている。

二〇〇二年春のこと、熊野町役場のそばにある筆工房の代表である西田さんに連らくが入った。「となりのトロ」で背景画をかいたジブリ絵職人の男鹿和雄さんが、数年前から質の低下した筆になやみ、スタジオジブリのスタッフと共に新たな筆を探していたのだ。そんな時、熊野町の「筆の里工房」を訪れたことで、熊野町の筆職人が筆をつくることになったのである。日本画筆を製造していた西田さんがその伝統技術を生かして筆の改良品をつくることになった。

その日から、アニメ用筆づくりの[1]試行錯誤の日々が始まった。さっそく、男鹿さんが大切にしていた使い心地のよい筆が見本として送られてきた。求められているのは、穂先のまとまり、適当な弾力、色ふくみのよさ、しなやかな描き心地である。そして、長持ちすることも求められた。西田さんは、

「絵職人をうならせたい。」

と見本の筆をにぎりしめた。プロ中のプロに満足してもらおうと「こだわりの筆」を求めて挑戦が始まった。

しかし、絵職人の理想の筆はそう簡単に作れるものではない。毛の配分、長さによってたくさんにかきづらくなる。原料の毛は天然のため同じ毛でもそのつど違うので、データ通りつくっても次に同じものができるとはかぎらない。よいかきあがった筆をスタジオジブリに送った。そしてできあがった筆づくりにはげんだ。

「使うことはできますが、満足するものではありません。」

男鹿さんらからのファックスの前で西田さんは何も言えなかった。

一年ほどで筆を使ってもらえるようになった。しかし、その後も(2)要望は、ファックスでそして電話で、次から次へと送られてくる。これ要望にかなう筆がなかなかつくれず、試行錯誤の日々が続いた。

「使い始めは、おっ、今回のは！ という感じ。しかし、何日か使っているうちに、穂先が思い通りになってくれないのが気になってきました。」

「イタチの毛の割合をかえてみよう・・・。」

「すべての毛が中心に向かって、まっすぐ集まってほしい。」

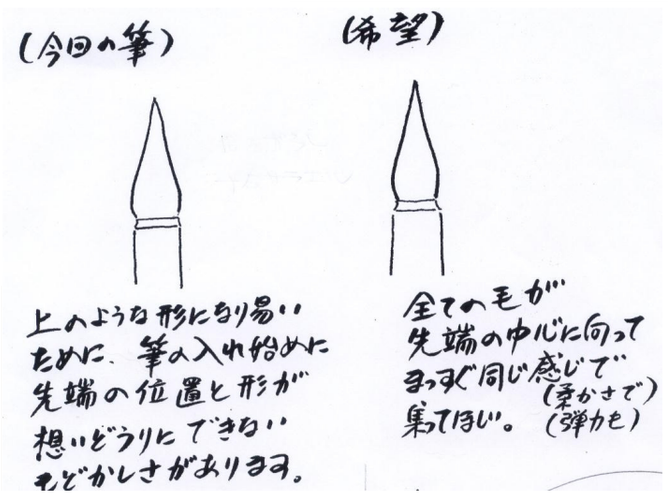
「『練りまぜ』をしっかりしてみよう・・・。」

「もっと、弾力や穂先のまとまりがほしい。」

「『選毛・毛組み』をやり直そう。」

西田さんは、要望のたびに、ねばり強くくふうしていった。男鹿さんやジブリスタッフの「こだわりの筆」を求めて大変な思いで(3)改良に改良を重ねていった。

男鹿さんのファックス



男鹿さんに送った筆

こうしたスタジオジブリとのやりとりにより、一本の筆で細かい線から幅のある面まで描けるオールマイティな筆ができあがった。ジブリスタッフから、

「ここ何年かこちらの要望をもとに試行錯誤をされて、このように使いやすい筆に仕上げていただいて、感謝しております。」

こんなファックスが届いた。今ではスタジオジブリの多くの筆が熊野町でつくられた筆なのである。熊野筆が、スタジオジブリの映画づくりにとって重要な役割を果たしている。そして、他のアニメ会社でも熊野筆は使われるようになった。熊野の伝統技術がアニメ映画の世界にも役立っているのだ。

しかし、ジブリ絵職人と筆職人による(4)妥協をゆるさぬものづくりは終わったわけではない。改良は今もそしてこれからも続いていく。

「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」

と西田さんは、アニメ筆を手に熱い思いで語る。

西田さん

西田さんと男鹿さん

【注】

（1）失敗を重ね、だんだんよくしていくこと。

（2）もとめのぞむこと。

（3）あらためてよくすること。

（4）両方が折れあって、話をつけること。

【参考文献】

男鹿和雄　スタジオジブリ責任編集「男鹿和雄画集Ⅱ」徳間書店　二〇〇五年